第一章　日本酒との真の出会いとそれまでのお酒との付き合い

1　日本酒との真の出会い

吟醸酒の衝撃

初めて日本酒を美味しいと思ったのは、一九八八年暮れ、三〇代も後半に入り、外務省入省から一三年以上も経ってのことでした。この日本酒との真の出会いが私の人生でも極めて重要な出来事の一つとなるのですが、まずなぜ「真の」出会いなのか、そして、なぜそれまで日本酒と縁がなかったかに触れねばなりません。

一九七一年四月、大学入学の直後にサークルの新入生歓迎コンパなるものに初めて参加し、大学のすぐ前にある居酒屋で飲み方も知らずに酒を飲んだというか、飲まされました。当時は日本酒、それも燗酒（かんざけ）の全盛期で多くのお銚子（ちょうし）が並んでいるのを見たのが最後の記憶です。二日酔いは三日目になっても収まらず、これで日本酒は不味（まず）くて危ない酒だという最悪のイメージが植え付けられてしまいました。未成年なのにけしからんと言われそうですが、私の年代の人間にとって飲酒年齢は今では考えられないほどルーズな扱いであり、二〇歳前にお酒を口にすることは珍しくなかったのです。これに懲りてその後は日本酒を飲むことはなく、ウィスキー、ブランデー、ワイン、ビールなどの洋酒を愉（たの）しむことになりましたが、それについては後で触れます。この日本酒との悲惨な出会いゆえに、美味しい日本酒との真の出会いはずっと後のことになったのです。

フランスでの研修を除き初めての在外勤務となったオーストラリアから帰国したのが、一九八八年六月です。新聞や雑誌で頻繁に日本酒の記事を見かけるようになり、気になって口にした日本酒は衝撃的でした。フルーティな香りに驚かされ、口に含むと爽やかなのにコクもある。長い間敬遠してきた日本酒とは全く別物でした。日本にも世界に誇れる酒

があったのだと感激し、これこそが日本の「国酒」だと嬉しさがこみ上げてきました。日本には世界に自慢できる酒がないからと洋酒ばかり飲んできたのですが、日本の外交官として悔しい思いもありました。そこに素晴らしい酒が舞い降りたのです。それが当時市場に出回り始めていた吟醸酒でした。

ただちに銘酒を求めて東京中の居酒屋を訪ね、飲み歩きました。九〇年当時のリストには、書き忘れも多いのですが、約一〇〇銘柄が記載されています。吟醸や純米など数種類を試した銘柄も多いのですが、ラベルでいうと三〇〇ほどでしょうか。北から主要なもののみを挙げると、男山、千歳鶴、田酒、両関、雪の茅舎、刈穂、米鶴、大山、出羽桜、初孫、一ノ蔵、浦霞、清泉、白瀧、八海山、久保田、〆張鶴、吉乃川、越乃寒梅、立山、銀盤、菊姫、天狗舞、獅子の里、富久駒、天鷹、東力士、郷乃誉、神亀、岩の井、春鶯囀、真澄、開運、若竹鬼ころし、三千盛、飛騨鬼ころし、醴泉、月の桂、玉乃光、諏訪泉、李白、賀茂泉、誠鏡、金陵、川鶴、梅錦、土佐鶴、司牡丹、三井の寿、美少年などです。飲んだ場所は、挙げ始めると際限がありませんが、きたやま、酒ばやしハンナ、赤鬼、酒膳一文、喜よし、シンスケ、味里、三春駒、絵馬亭、花ふぶきなど当時の名店が含まれていま

す。最初は一人で訪ね、気に入った店にはいろんな人を連れ出しました。

銘酒居酒屋・串駒に辿り着く

そして一九九〇年七月に豊島区大塚の串駒に辿り着いたことが、その後の私の酒人生、いや人生そのものを変えることにつながります。初訪問の日からご主人の大林禎さんと意気投合し、頻繁に通うことになりました。串駒は八〇年創業の日本の銘酒居酒屋の嚆矢です。残念なことに大林さんは二〇一四年に他界されました。パリに赴任中でお葬式に参列できなかったのが悔やまれます。大林さんが全国の蔵を巡って見つけ出した至極の名酒が大型のリーチイン冷蔵庫に今でも保管されています。また大林さんは、お酒だけでなく美味しく珍しい食材の発掘にも熱心でした。串駒で多くの素晴らしい酒と肴を味わい、多くの酒好きのお客さんと親しくなることができました。

当時所属していた会計課の仕事は忙しく、午後一〇時に退庁できれば早い方でした。半時間かけて串駒に出向き、〇時四一分大塚駅発の山手線内回り最終電車で帰宅していました。たまたま同じ山手線の新大久保にある公務員宿舎に住んでおり、非常に便利だったの

串駒にて。大林禎さん（右から二人目）、仲間たちと私（左端）

です。その後も海外勤務から日本に戻る際にはできるだけ早く申し込んで、何とか新大久保や高田馬場の公務員宿舎に入れるように頑張りました。串駒への通いやすさを考慮したからです。九一年の年初にベルギー大使館勤務に発令になってから多くの歓送会が開かれることとなり、「会場として可能であれば串駒を」と希望したので、一カ月に一〇回以上赴くことになりました。日本出発前の最高の思い出です。串駒は、大林さんの奥様の雪江さんが女将（おかみ）として現在も多くの愛飲家を集めています。

ひたすら良い酒との出会いを求めましたが、串駒との出会いから半年後にはベルギ

ー赴任で東京を離れることになってしまいました。居酒屋も含め日本酒との付き合いについての詳細は、第五章の日本酒外交の部分で述べることとし、ここでは外交官人生の半ばにしてようやく真の日本酒と邂逅(かいこう)したことに触れるに留(とど)めておきます。